

支部だより

【東京支部総会】

立ち上がる福島

平成二十五年の十月、三連休最後の十四日、恒例の原高同窓会東京支部の集いが、上野公園内の精養軒で開かれた。この日は秋なのに、まだ夏の暑さが残っていた。十一、十二日は東京都心で三十度を超し、観測史上最も遅い、真夏日だったと新聞は報じる。真夏の日だったと新聞は報じる。集う仲間に半袖シャツ姿が見られたのが、ほほえましかった。



十二時ちよど、司会の川鍋氏により、昨年の総会以降に亡くなられた同窓生への黙祷から、会が開かれる。高橋さんの開会の辞、古室支部長挨拶、議事に入り、役員改選で新支部長は十一回卒の紺野政弘氏になったとの報告がある。続いて渡辺同窓会会長、校長代理の増子教頭が挨拶。校長がこれになかったのは、娘さんの結婚式のためには、みんなニッコリ。これまでの挨拶にも東日本大震災復興への熱意ある言葉が発せられたが、「3・11災害の復旧・復興の現状」と題しての林秀之南相馬市建設部長の話には、すべての出席者が緊張のしつ放しであった。最後は山岸先生の進路・部活等の報告。町に子供がいなくなった——とちよと淋しく



げ。進学、入校の先々を憂慮されるものもつともと思う。また、どなたの話であったか、映画「土徳流離」への支援依頼の一幕もあった。これは震災に遭った相模地方を主舞台にしたドキュメンタリーもの。私も昨年九月、同じくドキュメンタリー映画「相馬看花」をみたことがある。映画を観終わって出口で出会ったのが監督の松林要樹氏、有難う、とこちらから礼をいうと求めたパンフレットにサインをしてくれた。今後の「土徳流離」の活躍を見守りたい。この日、私は十時前に上野にきていたのである。都美術館での「ターナー展」に入る。J・M・W・ターナーは風景画家の第一人者として名高い人で、英国水彩画の巨匠ともいわれている。展示絵のなかの「チャイルド・ハロルドの巡礼イタリヤ」に目を吸いつけられる。画面は縦一四二×横二四八センチと大きい。その左側河岸に一本の松の木が立つ。絵を前にしてドキリとする。

3・11で生き残った陸前高田の奇跡の一本松ではないかと。七万本もあったその中の一本だけが残ったのだ。その後、復興のシンボルとして復原されたが……。世情にはまだまだ大震災への思いが渦巻く。東京オリンピックが決まったとき、海外向けとはいえ「原発状況はコントロールされている」と言った安倍首相、「脱原発」発言を続ける小泉元首相らへの思惑は重く人々にのしかかっている。皆もそんな思いを抱きながらの同窓会参加であつただろう。

最後に登場したのが四回卒で、この会に招待された高野秀雄氏。浪江で遭難し、以後南相馬、新潟、埼玉、東京など九か所を転々、いまは福島市に住む。政府や電力会社は、原発は安全だと言いつつ続けているのに、人々が普通に暮らしているところを汚染させてしまったのだ。歌ってくれたのはインドネシアの「ブンガワン ソロ」。はてしなき/流れに遠き/昔を聞かん……。流浪の思いが滲む。あつねると、地元の浪江混声合唱団で三十年ほど歌っていたという。みんな、しんみり聞き入ったのはいうまでもない。但野 廣(四回卒)

同窓生の絆で継承されて30年

この度、昨年の支部総会にて支部長を拝命いたしました紺野野野です。どうぞ宜しくお願い申し上げます。就任にあたり、長年支部の発展にご尽力されました古室支部長に深く感謝申し上げます。私達支部会員は、32年前、何の就職先も無い故郷から、普通科の者は学力を付け進学する為、商業科の者は努力し資格を付け就職する為上京し、皆それぞれ多少落ち着きつつある時、馬場(相)佐藤(相)大澤(相三)を中心に、高橋(原二)達が昭和29年に作っていた同郷会を発展解消させ支部会結成を企画。二本松(原八)が勤務する中野サンプラザ前に、約30名(当時43歳の私が最年少)を集めた。まず、支部事務所を三輪(原

八)が社長をしている会社にて設置、全員で名簿集め開始。同窓生以外に福島県出身の国會議員の方々の応援を得て、特に斎藤邦吉先生秘書・高橋彰氏には大変お世話になり、翌年三〇名以上の同窓生が参加した第一回支部総会を開催することができ、それ以来30年同窓生の絆で継承されている。在校生の野球部が関東遠征に来ると、野球部OB手塚(原二)・打田(原八)が呼びかけ応援、県大会には郡山の開成山球場まで応援に、春高バレーには在校時代応援団長だった秋葉(原八)掃部関(原十二)を中心に代々木第一体育館に参集応援した。残念なのは未だ甲子園・京都駅伝応援に行けないことか。まず、私達支部は毎年の活動事

【原町支部】

「原九会」に参加して

平成二十五年八月二十四日(土)、三年振りに原九会(元気かい)が南相馬市のもりの湯で開催された。本来なら二年ごとに開かれる筈であったが大震災の影響で一年のびた。未だ交通アクセスが整備されていないことなどを考えると二十人も集まれば成功かなと思っていたが、二十四人も集まったのは少し驚かされた。恩師と二十三人の物語者に黙祷を捧げたあと、今回特に大震災による南相馬市内の被災状況を青木紀男君が被災マップや写真を使って詳しく説明してくれた。あらためて被災状況を再認識すると共に、復興の遅れに心が痛む



思いがした。次いで、原九回皆勤賞の北原時夫君が貫禄のある声で乾杯の発声。懇親会に入る。一九人の仲間が二十三人減ったこと、頑張った昔の仕事のこと、現在の自分や家族のこと、健康のこと、出席出来なかった仲間達のことなど話題の大半は他愛のないものだが、人生七十五年も生きてると似た様なこととお互いにあるもんだなあ

【小高支部】

小高支部の誇り

箱根駅伝で鳴らした小高区出身の今井正人君が26年2月2日、別府大分毎日マラソンで日本勢最高の銀メダルを手にした。一段一段前進していると自覚、今後も努力と話し。ところで、小高支部の活動は不本意ながら3・11の震災以来、物理的影響で全く休眠状態である。しかし、小高支部同窓生が徐々に頭角を現し、今では地区の中枢を担う力になっていくと自負している。同窓生の先輩として力強く、又誇りを感じている。昨年2月25日、世界の「トヨタ」社長・豊田章男氏が来市された。市内ジャスコモール内で盛大なトークショーが催され、聴衆に大きな感銘を与えた。その際の社長付き人からは前述の「山の神」今井君。そして何とこの大仕事の中核を担われたのは市内深野在住のNPO法人勤務の江本節子さん。司会の彼女は、大社長

と共感につながって、次から次へと話はずむ。会の終わり近く、井上精之君が十八番の「高校三年生」を披露する。折々の会合で良く聞かされたが、この様なクラス会だと妙にじっくり来て青春時代がよみ返る瞬間だ。最後にみんなで校歌を歌って散会。タクシー待ちの間、話し足りなくてロビーで雑談。市議会議員を退任した小林吉久君は目下、日本百名山踏破を目ざしている旨。感服の上なし。日本人の平均寿命は格段に伸びたが、健康寿命とは約十年の差があると言う。福岡のしのみ学園の昇地三郎さんや聖路加国際病院の日野原重明さんの様に百才を過ぎてても尚、元気凛冽として活躍している人もいる。そこ迄はいかなくとも、せめて米寿ぐらいは健康で雄々と通過したいものだと思いがかなり満ち足りた気分が帰路についた。

原高生への活動支援について

同窓会は、校内の他組織と協力体制をとりながら、独自に後輩生徒諸君に対し支援している。東日本大震災後、特に東京支部からの義援金は、一度はあきらめた生徒会行事、即ち在校生を「原高生」たらしめる活動を演出した。地元における同窓会活動の活性化を期して、平成二十三年一月に同窓会組織の強化策を検討し、それを受け「活動協力金」の募金活動を始めた。地元が震災と原発事故からの復興を果たすにはまだ時間がかかると見込まれる中、原高で学ぶ生徒に引き続き支援していきたいと考える。この場を借りて今年度いただいたご支援を紹介し、改めて御礼申し上げます。

- 一 「活動協力金」募金について
 - (一) 件数 二〇三件
 - (二) 金額 五九万一五〇円
 - (三) 振込手数料差引後の金額 一月三十一日現在)
- 二 義援金について
 - (一) 市川市北方健寿会様 二万円
 - (二) 原九会けんきょ会様 四万円
 - (三) 柏葉会様 五万円
 - (四) 東京支部様 一万九千円
 - (五) 柏葉会館への寄贈について
 - (一) 遠藤 由美様
 - (二) 冷蔵庫と洗濯機各一台
 - (三) 荒 忠敬様 洗濯機二台

来年度活動協力金について 平成26年度の活動協力金は4月から受け付けますので、ご協力をお願いします。詳細については原町高校HPの「卒業生の皆さまへ」をご覧ください。